

ブルキナファソの経済動向と 商社への期待

駐ブルキナファソ日本国特命全権大使 すぎうら つとむ
元 丸紅株式会社 杉浦 勉



独立50周年を迎えるブルキナファソ

ブルキナファソは西アフリカのサブサハラの国である。1897年にフランスの植民地となり、1960年にオートヴォルタという国名で独立し、1984年に現国名になった。2010年は独立50周年目に当たる。

内陸国であるため、地政学的に周辺国の平和と安定が同国発展の第一条件である。1987年に現コンパオレ大統領が政権を担ってからは比較的安定した政治情勢が続いている。同大統領は国内基盤の安定を土台に、コートジボワールやトーゴ、ギニアなどの紛争調停者として周辺国の平和構築に多大の貢献をしている。

2009年4月時点の人口は約1,550万人。国民は温和で勤勉であり、一緒に仕事をしやすい。しかし、文字を持たなかった歴史的背景から、国民の識字率はいまだに26%と低い。政府は教育に力を入れており、初等教育就学率は76%と近年大幅に上昇したが、中等教育や職業訓練教育の充実はこれからの課題である。また、貧困対策やマラリア、エイズ、結核などの感染症対策も深刻な課題である。その意味で日本からの教育、農業、水・衛生、環境、保健分野への重点的経済技術援助はブルキナファソ国民から非常に感謝されている。

本稿では、誌面の制約もあり、ブルキナファソの経済動向に焦点を絞って紹介するとともに、日本企業とりわけ商社への若干の期待を述べたい。

経済動向 ― 実質GDP成長率平均5.5%

ブルキナファソは長期にわたって堅調な経済成長を続けている。1995年から2008年の実質GDP成長率は年平均5.5%であった。しかし、その間人口増加率が年3%強と高かったことから、1人当たりGDPの伸び率は年2%弱にとどまっている。2009年の経済成長率は世界経済危機や9月の大洪水被害の影響により前年の5.2%から3.2%に鈍化した。そのため、国の貧困指数は43.2%と前年並み、1人当たりGDPは500ドル強と最貧国の1つにとどまっている。2009年のインフレ率は2.6%と前年の10.7%から大幅に低下した。労働人口の約7割は農林水産業等第1次産業に従事しているが、そのGDPに占める割合は31.4%にすぎない。そのため、地方農村部で貧困がより深刻である。

改善が進む投資環境

ブルキナファソの投資環境は年々改善している。世銀グループによるDoing Business 2010の格付けでは183ヵ国中147位と前年の155位から大幅に上昇した。特に企業設立にかかる日数が5-16日と西アフリカ経済通貨同盟（UEMOA）諸国平均の53日に比べてはるかに短期間で済む。

UEMOAにはブルキナファソなどフランス語圏の西アフリカ諸国8ヵ国が加盟しており、その総人口は約1億人に上る。域内で

は自由にモノ、人の移動ができ、ユーロと固定相場（1ユーロ＝655.957）で交換できるフラン（FCFA）が共通通貨として流通している。UEMOA 域内では域外輸入関税は統一されており、いったん域内に輸入された商品が他の域内諸国に流通する場合には関税はかからない。

1991 年以来国営組織の民営化が進められ、現在、電電公社、鉱山地理局、自動車管理局、石油公社などの民営化が進行中である。ほかに国際空港の民営化も検討されている。

現在、政府は「持続可能な発展のための成長促進戦略（SCADD）」を策定しつつある。草案では2011－2015年の経済成長率を年率8%と高く設定し、今後の重点項目としてインフラの整備、都市計画、農業・畜産部門の生産性と付加価値の向上、流通革新、鉱業エネルギー部門の開発促進等を掲げている。

急成長する「金」など鉱山部門への投資

投資分野として注目される鉱山部門では、2009年に鉱山開発権の付与数が前年比62件増の599件となり、同部門への投資額は3,670億FCFA（約734億円）に上った。特に近年、金鉱山への投資が米国、カナダ、豪州、英国などの外国企業によって積極的に推進されている。生産を開始した大型鉱区が5つあり、



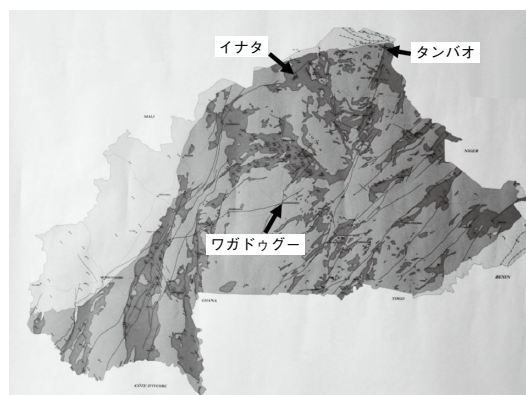
イナタ金鉱山の開所式
（中央列右から2人目が鉱山大臣、1人置いて首相、4月8日筆者撮影）

開発中のものが3ヵ所ある。そのほかに前近代的手法で金を採掘している鉱区が279ヵ所あり、国全体の金の生産量は2007年の1.5tから2008年の5t、2009年の11.6tへと飛躍的に伸びており、2010年末には22tに増加する見込みである。

日本の官民連携での動き

マンガンは北部サヘル地方のタンバオ鉱山が有望であるが、その開発には日本・ブラジル連合のほか中東、仏伊、印中などの企業グループが強い関心を示している。日本政府は日本・ブラジル連合を官民連携でブルキナファソ政府に強く働き掛けており、今後の展開が注目される。3月末のゾンゴ首相の「国家情勢報告」でタンバオ鉱山に関し年内に信頼できるパートナーを特定することが表明された。金やマンガンのほかにも、国境付近にはダイヤモンド、ウラン、石油、リン、銅などの埋蔵が確認されている。

図1 ブルキナファソの鉱物資源図

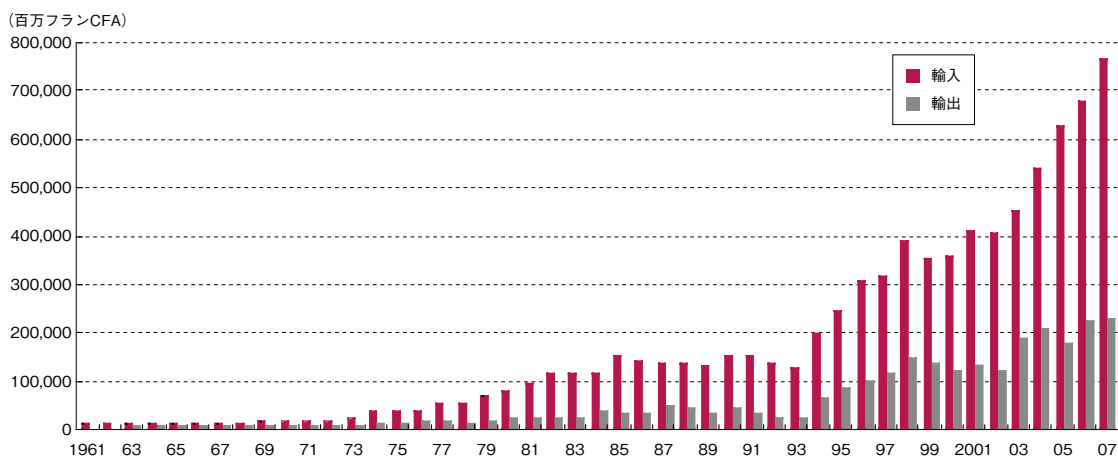


（出所）鉱山エネルギー省鉱山地理局

貿易動向 — 金が最大の輸出品に

輸出入共に1994年以降増加傾向にある。2007年の輸出（FOB（本船渡し）価格）は2,237

図2 ブルキナファソの輸出入推移



(出所) ブルキナファソ国立統計人口動態研究所「2008年版統計年鑑」2009年4月発行

億FCFA（約447億円）と2000年の1.9倍となり、2007年の輸入は7,591億FCFA（約1,518億円）と2000年の2.2倍となっている。

輸出を商品別に見ると、2006年時点では繊維が最大の輸出項目であり全体の75.5%を占める。次いで植物、食品飲料、油脂、宝石貴金属、動物と続き、この6項目で全体の95%を占めている。単一輸出品目として最大のものは綿花で、2006年の輸出は1,517億FCFA（約303億円）であった。次いでゴマ、カリテの実（シアバターの原料）、金が続いている。なお、金については、近年の生産量の急増を反映して2010年1月以降綿花を抜きブルキナファソ最大の輸出品目になった。

一方、輸入を商品別に見ると、鉱物燃料が27.4%と最大で、次いで一般機械・電気製品、化学品、植物、輸送機、金属製品、食品飲料、プラスチックと続き、これら8項目で全体の約90%を占めている。単一品目としてはガス・オイル、ガソリン、燃料油、医薬品、コメ、肥料、セメントなどが多い。

輸出入先の構成比を1996年から2005年

までの平均で見ると、輸出はアフリカ向け（47%）と欧州向け（45%）が多い。輸入は欧州（32%）、アフリカ（27%）、アジア（11%）と若干多角化している。近年、アフリカ域内との貿易が増加傾向にある。

貿易業界への期待

日本の商社にとってブルキナファソは市場規模が小さく、資源量も少ないため、資金効率や利益追求という点で魅力に乏しかったに違いない。しかし、戦後日本経済の発展を貿易振興に資することによって支えてきた商社が、貧困国から新興国へ脱皮しようとしているブルキナファソに、長期的な視野に立って人と資金を投入し、現段階から共に汗を流すことは、低所得国を対象とした「BOPビジネス」に真剣に取り組もうとしている貿易業界がこれから目指すべき道ではないだろうか。特定の得意分野を絞り込んで、製品の品質向上と輸出振興を図りつつ、この国の持続的経済発展に協力していこうという挑戦的な商社が登場することを切に期待したい。